四国大学紀要，(A) 40：73－82，2013
Bull. Shikoku Univ. (A) 40：73－82，2013

# 『拾遺和歌集』の副助詞サヘ
## ――平安朝和歌における〈周縁波及性〉の意義の一確認（其二）――

田中敏生

【論文概要】拾遺和歌集から副助詞サヘの用例を取り上げて、この語の基本的意義を〈周縁波及性〉に求めるという観点から、その使われ方を記述する。その際、附属する成分の種類によって用例を分かち、主格成分については下位分類をも立てたうえで、〈添加〉にまつわる二事項の間に〔本体―周縁〕的なありかたの見られることを、用例ごとに逐一検討する。その事を通して、基本義措定の拠り所を求め、併せて、群数性と程度量性とを共に併せ持つという意味での、この語の副助詞性把握の一つの支えとする。

【キーワード】拾遺集　副助詞　サヘ　周縁波及性　群数　程度量

### はじめに

本稿は、拾遺和歌集から副助詞サヘの用例を取り上げて、この語の基本的意義を〈周縁波及性〉に求めるという観点から、その使われ方の記述を試みるものである。

平安期のサヘは個別的に取り上げられることが少なく、通観的な論考において言及を見るにとどまる場合が多いが（文献④⑮⑤）、サヘがどのような意義的個性において〈添加〉の用法を担いえているかを尋ねることはできるし、それはこの語の副助詞性を理解する上でも、後代のダニとの交替現象について考える上でも、役立ちうるであろう。そうした考え方から、前々稿および前稿で古今集や後撰集のサヘについて見てきた（文献⑬⑭）。即ち、ある文中でサヘが用いられるとき、その接する語句が本体的と見なされる要素に対して周縁的な要素であることを示しつつ、本体に備わるあり方を波及的に共有する形でそれに添い加わってゆくことを示すという点にサヘの基本的性質を求め（注①）、そのそれぞれの用例において、添加にまつわる二事項間に〔本体―周縁〕的な関係が分析されることをもって右の基本義措定の拠り所としたわけであるが、ここではさらに拾遺集の用例に素材を求めて同様の検討を試みたい。それによって、〈周縁波及性〉というこの語の基本義の措定を些かなりとも着実ならしめることができればというのが、本稿のねらいである。

以下本稿では、右のような考え方のもとに、サヘの用例凡そ二十五例を次のように分かちながら見てゆくが（注②）、それは、群数性と程度量性とを共に併せ持つという意味でのこの語の副助詞性（注③）を、この文献での用例の限りに確かめる作業ともなるであろう。

（1）主格成分　一八例
（2）対格成分　二例

（3）ニ格成分　一例
（4）時の成分　三例
（5）引用成分　一例
〔合計　二五例〕

## 一　主格成分に附属するもの

主格成分に附属するサヘは十八例見える。これらは、〈添加〉のなされる項目どうしの関係から次のように分けておくことができよう。

A：自然から人間へ
B：人間から自然へ
C：人間から人間へ
D：自然から自然へ
E：主副的連繋

第一に、A〔自然から人間へ〕という方向で〈添加〉のなされるものとしては、次の一例を挙げることができる。

①年ごとに春のながめはせしかども身さへふるとも思はざりしを
（雑春・一〇五七、不知）

右は「長雨―降る」「眺め―古る」といった重層的な仕立てになっている。「年ごとに春につきものの長雨は降っていたが、そのように毎年もの思いに耽っているうちに、長雨が降るばかりでなく、私自身までもが古びることになったのは思いも懸けないことだ」との謂であろう。「雑春」の部立てを重んずれば、長雨が降るという自然の事象が第一のものであり、そこに人間についても「古る」ということが加わっていると認められよう。〈周縁波及性〉の意義もまた、そのようなありように即して働いているわけである。

第二に、B〔人間から自然へ〕という方向で〈添加〉のなされるものとしては、次の三例が見られる。

①君なくて立朝霧は藤衣池さへきるぞ悲しかりける
（哀傷・一二八八、敦忠）

②頼めつゝ別し人を待つほどに年さへせめてうらめしき哉
（雑恋・一二七三、貫之）

③我が背子を我が恋ひをれば我が宿の草さへ思ひうら枯れにけり
（恋三・八四五、人麿）

①は詞書に《朱雀院の御四十九日の法事に、かの院の池の面（おも）に霧の立ちわたりて侍けるを見て》とある。朱雀院の崩御は天暦六（九五二）年のこととされる。院の御所の池に霧の立ちこめているのを、喪服の薄墨色に見なして詠んでいる。「私どもが藤衣を着るばかりでなく、池までもが薄墨色になってそれを〝きる〟ように見えるのが悲しいことだ」の意であろう。喪服を着るというのは本来人間に属することがらであるが、それが人間を取り巻く環境としての自然にまで想像力の視覚を通して及んでゆく。そんな形で〈周縁波及性〉の意義が発揮されていると言えよう。

②は詞書に《年の終に人待ち侍ける人の詠み侍ける》とある。空頼めを恨む歌である。来てくれない人ばかりでなく、終わりの迫り来る年までもが切に恨めしいの意であろう（注④）。約束を反故にする人こそ「恨めし」という情意の向かう対象として本来ふさわしいはずであるが、そこからさらに、容赦なく流れ去る時までもがその対象となる。そうした〈添加〉の行われているところに、この語の基本的意義がよく見て取れよう（注⑤）。

③は、万葉歌の摂取である（巻十一・二四六五、寄物陳思）。万葉では初句《我背児尓》であり、末句《浦乾来》は今は「うらぶれにけり」と訓まれている（注⑥）。「うらぶる」だと《しよんぼりと力なく、心の萎れるやうな状態》（万葉集巻五・八七七の澤瀉氏注釈）を表わすが、「うら枯る」だと「葉末が枯れる」の意となる（注⑦）。歌意は、「愛しい人を恋い慕っていると、家の庭の草までもが思いのために葉末を枯らしてしまった」と

いったものであろう。思慕の情に心萎れる状態というのはもとより人間にあってこそ本来のものであるが、あたかもそれに共感するかのように植物のあり方にまでそれが及んでゆく。そうした点に〔本体―周縁〕的なあり方を見て取ることができよう。

第三に、C〔人間から人間へ〕という方向での〈添加〉としては、次のような例を挙げることができる。

①彦星の妻待つ宵の秋風に我さへあやな人ぞ恋しき（秋・一四二、躬恒）
②かく許うしと思に恋しきは我さへ心二つ有けり（恋五・九八九、不知）
③雲井なる人を遥かに思ふには我が心さへ空にこそなれ
（恋四・九〇九、源経基）
④わび人はうき世中に生けらじと思事さへかなはざりけり
（雑上・五〇五、源景明）
⑤いかでかと思心のある時はおぼめくさへぞうれしかりける
（恋一・六九三、不知）

①は、詞書に《延喜御時屏風歌》とある。抄に《秋の夜は物さびしくて、おのづから人も恋しく覚ゆれば》とあるのが、心理的な素地をよく説き尽していよう。「我さへあやな」は《私までがなぜかわけもなく》（新大系）の意である。七夕の当事者から、その光景を想像しているに過ぎない者へという形で〈添加〉がなされている。〈周縁波及性〉の意義もまた、そうしたあり方に即して発揮されていると言えよう。

②は、季吟の抄に《うしとおもふこゝろと、恋しき心とふたつ有と也》とあるのが明快であろう。「二心」とは本来不実な心の所産であり、相手の場合はまさにそれであって、その意味でまともに「心二つ有り」ということになるが、それに対して詠み手の場合は、相手の浮薄さによってこそ心が引き裂かれたのであり、本来「二心」とは無縁なはずの一途さの中での、一面での共通点が見られるに過ぎない。そうした意味で〔本体―周縁〕的な関係を認めることができよう。サへもまたそのようなあり方において、周縁波及的な〈添加〉を行っているわけである。

③は詞書に《遠き所に思ふ人を置き侍て》とある。歌意は「あなたの居る所が遠方でまるで雲の居る空のような所なものですから、あなたを思う私の心までもが上の空という空のようなものになってしまいます」といったものであろう。相手の「雲井遥かな状態」は、いわば既定の客観的な状況であるのに対して、我が心の「空」なる状態はそれによって二次的に惹き起こされたものであり、その意味で周縁的な位置を占める。〈周縁波及性〉の意義もまた、そのようなあり方において発揮されていると言えよう（注⑧）。

④は、詞書に《つかさ申に賜はらざりける頃、人のとぶらひにおこせたりける返事に》とある。《我昇進のかなはぬ歎き》（抄）が一首の眼目である。生きることを前提とした上での願いから、生きること自体を放棄する願いへという形で添加がなされている。一般に人間のさまざまな願いというものは生きていることを前提としてこそなされるのであってみれば、生きること自体は自明のことがらとして願いの内容の埒外にあるはずであるが、そのようなことがらにまで（それを止めようという否定的な思いからではあれ）願いの触手が及んでくる。そうした点に〔本体―周縁〕的な〈添加〉のありようを認めることができよう（注⑨）。

⑤の「おぼめく」は《しらずがほにあへしらふ》（抄）の義であり、《少しとりあへるも只なるよりは悦ぶ》（同）ことを詠んでいる。様々にありうる相手の反応のうちもっとも嬉しいのはもとより逢ってくれることであるが、そのようなものばかりでなく、知らぬふりをするといったふうな、そんなことまでもが嬉しい、との趣意である。価値的に上位のものに対して下位のものが添い加わってゆくところに〈周縁波及性〉の意義を見て取ることができよう（④⑤は或る人における二つの思いや所作をめぐる〈添加〉であって、或る人に他の人が加わるものではないが、人間にまつわるという限りに姑くここに含めておくことにした）。

第四に、D〔自然から自然へ〕という方向での〈添加〉としては、次のような例が見られる。

①天の原空さへさえや渡らん氷と見ゆる冬の夜の月
（冬・二四二、恵慶法師）

②千とせふる松が崎にはむれゐつゝ鶴さへあそぶ心あるらし
（神楽歌・六〇七、元輔）

③あたらしき年にはあれども鶯の鳴く音さへには変らざりけり
（雑春・一〇〇二、不知）

④梁見れば河風いたく吹く時ぞ浪の花さへ落ちまさりける
（雑春・一〇六一、貫之）

⑤新しき春さへ近くなりゆけばふりのみまさる年の雪哉
（冬・二五五、能宣）

⑥いつしかと暮を待つ間の大空は曇るさへこそうれしかりけれ
（恋二・七二二、不知）

⑦水無月の土さへ裂けて照る日にも我が袖干めや妹に逢はずして
（恋三・八二五、不知）

①は、詞書に《月を見て詠める》とあり、家集には《冬のよの月》とある（一一六。但し第三句《まさるらむ》。新編大観による）。本体としての月自身の発する冷え冷えとしたあり方が、あたかも放射される光の影響を被るかのように、大空全体へと及ぼされてゆく。そんなあり方での〈添加〉がなされていると言えよう。〈周縁波及性〉の意義もまた、そうした点に見て取られるわけである。

②は、「松が崎という名前には千年を経るという意味が備わるが、その千年ということにゆかりの深い鶴までもが飛び来たって舞い遊ぶ」という意味の歌である。「松が崎」は地名であり確乎不動のものであるのに対して、鶴は浮動的であり偶有的にそこに共存しているに過ぎない。そうした意味で〔本体―周縁〕的な関係を認めることができよう。

③は、「年は新しくなったけれども、鶯の鳴き声までもがそれと共に変わるということはなかった」との趣意であろう。年が改まることはこの世界全体にかかわる包括的なことがらであるが、鶯の鳴き声は森羅万象中のほんの一瑣事であるに過ぎない。そうした意味で〔本体―周縁〕的な関係を了解することができよう。文全体としては否定のはたらきを受けて変化がそこにまでは及ばないことを表わすが、否定されることがら自体は〈周縁波及性〉の意義に基づく〈添加〉によって形作られているわけである（注⑩）。

④は、詞書に《延喜御時、御屏風に》とあり、貫之集（一一九）では《簗》と題する（係り結びは「ぞ―ける」ではなく「は―けり」となっている）。《魚ばかりでなく、波の花までが一段と多く落ちかかる》（新大系）の意であろう。梁本来のはたらきから言えば魚こそがそこに落ちかかって然るべきものであるが、激しい風によって梁の目的とは無縁であるはずの波の花までもがそれに加えて落ちかかるということであって、そのような形で、周縁波及的な〈添加〉がなされていると言えよう。

⑤は、詞書に《屏風に》とある。通常の時の推移のうえに、特に新年が近づくということまでもが添い加わるので、いよいよ雪が降りまさり、年もひたすら古くなるとの意であろう。時が経つこと自体はいつと限らず常になされていることがらであるが、それに加えてたった一度の区切りである新年というものまでもが近づいてくる。そんな形での〈添加〉がなされていると言えよう。〈周縁波及性〉の意義もまた、そうしたありかたにおいて働いているわけである。

⑥は、「暮れるの待っているときには、当の暮れるということばかりでなく、単に曇るということまでもが嬉しいものに思われてくる」といった趣意の歌である。C・⑤の「おぼめくさへ」がそうであったように、ここでも、本来的に願われていることがらから、望ましさにおいてそれに劣ることがらへ「うれし」と感ずる対象が及んでくるわけであって、そうした

形での〈添加〉がなされていると言えよう。

⑦は、我が袖の涙は灼けつくような真夏の日射しにも決して乾くことはないむね詠じている。「土さへ裂けて」は、熱暑のもたらす結果面からその激しさを表わすものであり、『あゆひ抄』では「しるしのて」の例としてこの歌が引かれている（文献⑯、三一三頁）。ここでのサへによる添加は、結果的事態としてごく通常のものに対してなされていると考えてよいかと思われる。「単に気温が上がったり、水気が無くなったりするばかりでなく、地面までもが干涸び裂けて」といったふうな気味あいである。太陽エネルギーによって通常惹き起こされるものに対して、めったに見られないような事象が添加されている。そうした点に〔本体―周縁〕的なありようを認めることができると言えよう。

第五に、E〔主副的連繋〕とも言うべきありようを踏まえて〈添加〉のなされるものが二例見える。

①行末のしるし許に残るべき松さへいたく老いにける哉

（雑上・四六一、道済）

②たこの浦の底さへにほふ藤浪をかざして行かん見ぬ人のため

（夏・八八、人麿）

①は、詞書に《河原院の古松を詠み侍ける》とある。本体としての河原の院に対して、その存在の僅かながらもの痕跡としての松が添い加わっている。老朽による衰滅が本体からその付属物へと及んでくるわけであって、そうした点に〈周縁波及性〉の意義を見て取ることができる。

②は、詞書に《たこの浦の藤花を見侍て》とある。「底」は、事実上水底に映った写像としての藤の花を指していよう（万葉では直前の家持の歌に《藤波の影なす海の底清み》とある。本文は新大系）。《実像の花に、虚像の花まで加わる》（新大系）と説かれる所以である。〔本体―周縁〕的な関係は明らかであろう。〈周縁波及性〉の意義もまたそのようなあり方に即して発揮されるわけである（注⑪）。

以上、主格成分に附属するサへについて、添加にまつわる二事項における内容面でのあり方をいくつかの類型に分けながら見てきた。これを、古今や後撰でのあり方と較べると【表Ⅰ】のようになる（対照の便のため、A～Eの符号付けは本稿のそれに揃えてある。古今を扱った前々稿ではEは独立のグループとなっている。また後撰を扱った前稿ではC「人間から人間へ」の用例を欠くため、ここでのD・Eはそれぞれ C・Dとなっている）。

【表Ⅰ】

| | 古今 | 後撰 | 拾遺 |
|---|---|---|---|
| A：自然から人間へ | 八例 | 五例 | 一例 |
| B：人間から自然へ | 三例 | 六例 | 三例 |
| C：人間から人間へ | 二例 | ／ | 五例 |
| D：自然から自然へ | ／ | 二例 | 七例 |
| E：主副的連繋 | 九例 | 六例 | 二例 |
| 合計 | 二二例 | 一九例 | 一八例 |

この表から見て取られる一つの傾向は、AやBが減って、CやDが増えていることであろう。人事と自然とを絡みあわせ、その対立交錯の中で歌を組み立てるのが古今歌人たちの行き方であった（文献㉒）。拾遺集ではそのような詠みぶりが潜まり、自然や人間をそれ自体として取り上げる行き方が表立つようになってきた――そんな移りゆきの姿を（主格成分に附属するサへを通して見た限りにおいてではあるが）読み取ることもできなくはない。拾遺集の特徴として「平明化」ということが文藝史家によって言われるが（文献③、二七一頁以下）、右のような移りゆきにそうした傾向が影を落としていると考えるとしても、あながち附会とも言えなかろう。Eの主副的連繋が少なくなるということもまた、素材面における二項の繋がりを利して巧む詠み方が少なくなったという意味で、それと歩みを同じくするものでありそうに思われる。

しかしながら、これらはあくまで添加にまつわる内容面での移り行きで

あって、些かの感触の異なりを感じ取らせはするにしても、サヘ自身が決定的に変質したことを物語るとまでは考えなくてよいのではないかと思われる。既に見たようにサヘは否定の外側にも内側にも現われることができたし（C・④、D・③。注⑨⑩も参照）、また次節で見るように仮定条件句や禁止文で自由に使うことができる（九八五・時の成分③、三一・対格成分①）。こうしたことがら自体は、古今や後撰のサヘとほぼ同質のふるまい方をしていると受け止めることもできようからである。

## 二　主格以外の成分に附属するもの

冒頭にも掲げたように、主格以外の成分に附属するサヘには、次のようなものがある。

対格成分　二例
ニ格の成分　一例
時の成分　三例
引用成分　一例
〔合計　七例〕

まず、対格成分に附属するサヘは、次の二例である。

①匂をば風に添ふとも梅花色さへあやなあだに散らすな
（春・三一、能宣）

②衣だに中に有しはうとかりき逢はぬ夜をさへ隔てつるかな
（恋三・七九八、不知）

①は、風の影響を蒙るものをめぐって、「匂ひ」に「色」を加える形で〈添加〉がなされている。「匂ひ」が風によって運ばれてくることは固より好ましいことであるが、花それ自体を散らすことは全くあらずもがなの余計なしわざであって、そうした意味で、周縁波及的な添加のありようを見て取ることができると言えよう（注⑫）。

②は、《「だに」と「さへ」とに、愛情の推移が対照的に示されている》（新大系）と評された歌である。衣が隔てるだけでももどかしく思うほど親密な仲であったのに、今では衣どころか逢わぬ夜という時間までをも隔てるようになったの意であろう。不本意なものの度合いとしてはむしろ大きな要素へ向かっているとも見られるが、衣を隔てることさえもどかしく感じられるような親密な仲であった状態に身を置いて眺めるならば、幾夜も隔てるなどということは思いも寄らないことであって、そうした意味で周縁的な要素であると言えよう。サヘもまた、そのようなありように即して自身の意義を発揮しているわけである。

次に、ニ格の成分に附属するサヘとしては、次の一例が挙げられる。

①夢にさへひとのつれなく見えつれば寝ても覚めても物をこそ思へ
（恋四・九一九、不知）

右は「現実の世界ばかりでなく夢の世界にあってまでも」といった意味での添加であろう。現実の世界はそれこそが本当に世界と呼ぶに値するものとして確乎たる存在感を備えるのに対して、夢の世界はいわばその模写物であり、存在感の欠如と引き換えに可変性を帯びた世界でもある。そのような不確定で二次的な世界にまで現実と同様の不本意なあり方が及んでくるというのが、ここでの添加だと言えよう。〈周縁波及性〉の意義もまたそうした点に認めることができるわけである。

さらに、時を表わす成分に附属するサヘとしては、次の三例がある。

①今日さへやよそに見るべき彦星の立ちならすらん天の河浪
（恋二・七七二、不知）

②白浪のうちしきりつゝ今夜（こよひ）さへいかでかひとり寝るとかや君
（恋四・八五一、不知）

③怨ての後さへ人のつらからばいかに言ひてか音をも泣かまし
（恋五・九八五、不知）

①の「よそに」は「他人事として」の意があるとされる（新大系、七七

一番歌・脚注)。歌意は「七夕の逢瀬である今日という日にまでも、彦星の踏み渡る天の川の河浪をよそ事として見ることになるのだろうか(逢えないのだろうか)」といったものであろう。サヘは、「ふだんの日に加えて、七夕の逢瀬である今日という日にまでも」といった意味での添加を表わしている。「よそに見る」ということが、そうであっても仕方のないふだんの日から、それが取り除かれてもよいような特別な日へと推し及ぼされる。そうした点に〔本体―周縁〕的なありようを見て取ることができよう。

②の「うちしきりつつ」については、季吟の抄に《打しきりつゝ御使ひは給りての心也》とあり、新大系もこれを引く。「いかでか独り寝る」までが相手からのご機嫌伺いの言葉であり、「とかや君」でそれを受けて「そんなことをお尋ねになるのですか」の意で訪ね返しているとされる。姑くこの解によるならば、「これまでさんざん繰り返してきた通り一遍のご挨拶を、これまでに加えて今日もまたなさるのですか」といった趣意になる。訪れを待つ身からすれば、肩すかしの日が重なれば重なるほどそれを厭う気持ちもまた募ってゆく。そうした意味で、訪れない状態がまだしも容認できる時点からそうでない時点へと拡がってゆく体の〈添加〉がなされていると言えよう。

③については、季吟の抄に《つらき人を恨るは、其恨めしき事をやめさせんため也》とあるのが要を尽していよう。人が冷淡なのを、そうしてほしくないためにこそ恨んだ、その後にあってまでもの意である。ここでも、「つらし」というありかたが生じても容認しやすい状況から容認しづらい状態へといった形で添加がなされている。〈周縁波及性〉の意義もまた、そうしたありようにおいて発揮されているわけである(注⑬)。

最後に、引用成分に附属するサヘが一例見える。

①(前略)なにしかも　我のみひとり　うき舟の　こがれて世には　渡るらん　とさへぞ果は　かやり火の　くゆる心も　つきぬべく　思なるまで　おとづれず(後略)　(雑下・五七三、不知)

右は長歌の一節である。詞書には《ある男のもの言ひ侍ける女の、忍びて逃げ侍て、年ごろありて消息して侍けるに、男の詠み侍ける》とある。最終的には「仲良く暮らそう」ということになるが、前半部分では、さよならも言わずに居なくなった女性への恨みや嘆きを詠み込んでいる。待っても待っても帰る気配もなく、さりとて便りを送る手立てもなく、さらには、こんな惨めな思いは自分ひとりだといった嘆きまで加わって思い屈していたというのである。ここでのサヘは、通常誰しもが懐くようなもの思いに止まらず、いっそう募り嵩じた鬱情までもが添い加わることを言うのに用いられている。そうした点に、〈周縁波及性〉の意義の発揮されているありさまを認めることができよう(注⑭)。

## むすび

以上、拾遺集に見えるサヘ凡そ二十五例を取り上げて、その使われ方を見てきた。そのそれぞれの用例において、〔本体―周縁〕的な〈添加〉のありようを観察することができたのではないかと思われる。要略を記せば、主格成分にあっては、自然と人間との間に、また自然や人間それぞれの間において、さらには主・副的な連繋を踏まえる形で、〔本体―周縁〕的な添加のなされるありさまを見て取ることができたし、主格以外の諸成分においても、それぞれに同様の関係を見出すことができた。サヘもまた、そうした内容面でのありように相即する形で、〈周縁波及性〉の意義をはたらかせていたと考えてよいであろう。

この語の副助詞性ということもまた、そうした意義との関わりにおいて把握することができる。サヘは、二つの事項の関係を表わす点で群数性を備えるとともに、その関係が軽重差に基づくという限りに程度量性をも併せ持つのであって、こうした二面の両々あい渾融する点において歴たる副助詞性を備えていると言えよう。『あゆひ抄』(文献⑯、二四三～七頁)がダ

ニやスラとともにこの語を同一グループに括った理由もまた、そうした点から了解されるわけである。

冒頭にも述べたように平安期のサヘは独立に論ぜられることが少なく、その実態の解明はあまり進んでいない。本稿では、そうした欠を些かなりとも埋めるべく、拾遺和歌集での用例を検討してきたのであった。

〔付記〕『拾遺和歌集』の本文は次の文献に依った。

・新日本古典文学大系『拾遺和歌集』（小町谷照彦校注　一九九〇　岩波書店）

用例の掲出に際しては、次のような行き方を取った。

・末尾に（部立・大観番号、作者）を記した。

・作者名は「紀貫之→貫之」のように適宜節略した。

・「よみ人知らず」は「不知」で示した。

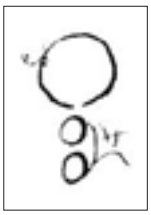
・歴史的仮名遣いが傍書されているものはそれに従った。

歌の解釈に際しては、次の書物を参看した。

・北村季吟『八代集抄』（山岸徳平編）『八代集全註』第一巻　一九六〇　有精堂）〔原著の拾遺集註解部分は延宝七（一六七九）年八月から同年十一月までであり、後撰集に先立って書かれている〕

これらの書物の引照に際しては、「新大系」「抄」などの略称を適宜用いた。

## 注



（注①）サヘの附属する要素が本体的事項に対して周縁的なありかたを帯びるという捉え方は、夙く『稿本あゆひ抄』の図（文献⑥、三九四頁。文献⑦、一一一頁。上掲の図は後者による）に窺うことができる。松尾捨治郎『国語法論攷』でも《副貳的に添加する意》（文献⑲、四五六頁）を表わすとされる。前々稿および前稿同様、本稿でのサヘの理解もまた、こうした先行研究の知見に触発されている。

（注②）文献⑬の注⑧の表では「主格一七例、対格三例」としていたが、本稿では「主格一八例、対格二例」と改めた。

（注③）文献㉑による。文献⑨⑩⑪や文献⑧では、同じく森重氏に基づきながらも、副助詞の類的個性を「量性の意味領域において働く」という点に見ていたが、本稿では前々稿および前稿（文献⑬⑭）と同じく、より分析的なこの捉え方を取ることにする。そうすることの意味については、文献⑫の「むすび」を参看されたい。

（注④）情意性形容詞を修飾する「せめて」は古今集に次の小町の歌が見える。

・いとせめて恋しき時はむばたまの夜の衣を返してぞ着る　（五五四）

遠鏡では《キツウサシツマーツテ》と釈されている（全集・三、一五七頁。以上については、文献①、一〇八頁に既に指摘が見える）

（注⑤）なお、好忠の三百六十首に次の歌があって（二三四）、拾遺集にも採られている。ここでは、人よりも風のほうが恨めしいという形での感情の転移が見られる。

・我が背子が来まさぬ宵の秋風は来ぬ人よりもうらめしき哉　（恋三・八三三、好忠）

また次の歌では感情の対象が原因（造物主）へと溯っている。

・君見れば結ぶの神ぞうらめしきつれなき人を何作りけん　（雑恋・一二六五、不知）

（注⑥）周知のように、上代特殊仮名遣いに基づく知見によれば「干る」は奈良時代には上二段活用「ふ」であり、原文の「乾」はその已然形「ふれ」の借訓仮名と見るところからこのような訓みになる（文献⑰。文献⑱、一八二～三頁）

（注⑦）「うら枯る」は、八代集ではこの歌が初見であるが、新古今の次の歌は坂上是則（古今歌人）の作となっている（本文は岩波・新大系による）。

・うらがる、浅茅が原のかるかやの乱れてものを思ふころかな　（秋上・三四五）

（注⑧）「雲居」と「心空になる」とを組み合わせて遠くに居る人を慕う気持ちを詠んだ歌としては、既に後撰に次の例がある（但し離別。六帖・四「別れ」にも載せる）

・別ゆく道の雲ゐになりゆけばとまる心もそらにこそなれ　（後撰・離別・一三二四、不知）

なお、「心」と「空」との結び付いた例は、古今以来少なからず見える。次に一例のみ掲げる。詞書に《元輔が婿になりて朝に》とある。後朝の

歌である。

・時の間も心は空になる物をいかで過ぐしし昔なるらむ

（拾遺・恋四・八五〇、実方）

（注⑨）この歌の場合、サへの接する語句は、「叶はず」という否定的な事態全体に対して、いわば外側から関わっている。文献⑳の用語を借り用いるなら「Wスコープ」ということになる。後拾遺の次の歌にも同種のサヘが見える（本文は新体系）。

・忘れなんと思ふさへこそ思ふことかなはぬ身にはかなはざりけれ

（恋三・七五九、大弐良基）

（注⑩）文献⑳の用語を借りるなら、ここでのサヘは「Nスコープ」ということになろう。禁止文で用いられたサヘ（三一・対格成分①。後出）も同様に見なしてよいと思われる。既に後撰集にも次のような例が見えた（文献⑭）。

・今日よりは夏の衣に成ぬれど着る人さへは変らざりけり

（夏・一四七、不知）

また古今集には否定推量の「じ」と共に用いられた例もある（文献⑬）。

・かぎりなき思ひのまゝに夜も来む夢路をさへに人はとがめじ

（恋三・六五七、小町）

（注⑪）万葉集（十九・四二〇〇）の歌であり、作者は人麿ではなく内蔵忌寸縄麻呂である（左注）。天平勝宝二年（七五〇年）四月十二日に家持らが布勢の水海を遊覧したときに詠まれたものであり、二五〇年ほど昔の歌ということになるが、当時の人達にも理解鑑賞に堪えるものとして受け容れられていたからこそ、集にも撰ばれたのであろう。そうした意味で用例に含めることにした（B・③の万葉歌についても同様）。拾遺集の万葉歌が万葉原典からではなく当時流布していたであろう私家集の類から採られたものではないかとする見解（文献②）も、右の考え方を支持してくれそうに思われる。

（注⑫）ここでのサヘは禁止文で用いられているが、命令文で用いられるサヘであれば、古今・一〇七八の歌に見えた。

（注⑬）仮定条件句で用いられるサヘは、古今・二〇の歌にも見えた。

（注⑭）引用成分に附属するサヘは、勅撰集ではこれが初出であるが、私撰集まで拡げれば貫之集に次のような例を見出すことができる（本文は新潮日本古典集成『土佐日記　貫之集』による）。

・糸とさへ見えて流るる滝なればたゆべくもあらずぬける白玉

（一七八）

詞書に《女どもの滝見たるところ》とある。《延長四年〔九二六年〕、清貫の民部卿六十賀、恒佐の中納言の北の方〔＝清貫の娘〕せられける》とある一連の屏風歌の中の一首である。「滝が切れ目もなく連続して流れるばかりでなく、そのうえ糸筋のように見えもするものだから」といったほどの意味あいを表わすものであろう。なお、和文では多くて、〔蜻蛉日記・四例、枕草子・二例、大鏡・一例〕といった状況である。

## 参考文献


①井手　至（一九五五＝二〇〇三）「国語副詞の史的研究⑴「せめて」について」『人文研究』六巻五号〔『国語副詞の史的研究』（一九九一　新典社。二〇〇三　増補版）所収。引照は後者・増補版による〕

②奥村恒哉（一九五五）「拾遺集の万葉歌」『万葉』一四号

③小西甚一（一九八五）『日本文藝史Ⅱ』（講談社）

④此島正年（一九六六）『国語助詞の研究』（桜楓社）

⑤鈴木ひとみ（二〇〇五）「副助詞サエ（サヘ）の用法とその変遷―ダニとの関連において―」『日本語学論集』一号（東京大学）

⑥竹岡正夫（編）（一九六一）『富士谷成章全集・上』（風間書房）

⑦竹岡正夫（解説）（一九七八）『稿本あゆひ抄』（勉誠社文庫・四五）

⑧田中敏生（二〇〇三）「集中的専一性における項目限定性と事態波及性―古今和歌集における副助詞ノミの意味的なはたらき方をめぐって―」藤岡忠美先生喜寿記念論文集『古代中世和歌文学の研究』（和泉書院）所収

⑨田中敏生（二〇〇七）「『蜻蛉日記』における副助詞ダニの諸用法とその連関―〈相対的軽少性〉の意義に基づく統一的理解の試み―」『四国大学紀要』二八号

⑩田中敏生（二〇〇八）「『枕草子』の副助詞ダニ―中古における〈相対的軽少性〉の意義の一確認―」『四国大学紀要』三〇号

⑪田中敏生（二〇〇八）「『大鏡』の副助詞ダニ―平安時代における〈相対的軽少性〉の意義の一確認―」『言語文化』六号（四国大学）

⑫田中敏生（二〇一二）「『古今和歌集』の副助詞ダニ―〈相対的軽少性〉の意義をめぐって―」『四国大学紀要』三八号

⑬田中敏生（二〇一二）「『古今和歌集』の副助詞「サヘ」―基本義〈周縁波及性〉措定の試み―」『言語文化』一〇号（四国大学）

⑭田中敏生（二〇一三）「『後撰和歌集』の副助詞サヘ―平安朝和歌における〈周縁波及性〉の意義の一確認―」『四国大学紀要』三九号

⑮田村清子（一九八四）「副助詞の変遷―その契機の解明を中心に―」『国語

と教育』九号（長崎大学）
⑯中田祝夫・竹岡正夫（一九六〇）『あゆひ抄新注』（風間書房）
⑰橋本進吉（一九三一）「上代に於ける波行上一段活用に就いて」『国語国文』一巻一号
⑱橋本進吉（一九五〇）『国語音韻の研究（橋本進吉博士著作集4）』（岩波書店）
⑲松尾捨治郎（一九三六）『国語法論攷』（白帝社増補版（一九七〇）による）
⑳茂木俊伸（一九九九）「とりたて詞「まで」「さえ」について―否定との関わりから―」『日本語と日本文学』二八号（筑波大学）〔著者pdf版による〕
㉑森重　敏（一九五四）「群数および程度量としての副助詞」『国語国文』二三巻二号
㉒森重　敏（一九六一～二）「古今和歌集における「古」と「近」―文体論的考察―（上）（下）」『奈良女子大学文学会研究年報』Ⅳ～Ⅴ（『文体の論理』（一九六七　風間書房）所収。引照は後者による）

（田中敏生　四国大学文学部国語学研究室）